

平成30年度（2018年度）

武庫川女子大学大学院

修士論文要旨

柔道におけるオノマトペを使った効果的な指導法

健康・スポーツ科学研究科健康・スポーツ科学専攻

山中 雄介

【背景】

オノマトペは擬声語・擬音語・擬態語の総称（集英社国語辞典，2012）とされており，本研究では一括してオノマトペとして取り扱うこととする．スポーツ領域においても，オノマトペが日常生活同様，コミュニケーションのツールとして頻繁かつ豊かに使われている（吉川，2010）．また，スポーツ指導の際に80％の指導者は無意識的にオノマトペを使用していることが明らかとなっている（外山ら，2002）．オノマトペの長所として「言葉でいい表せない複雑な動作内容も簡単に説明できる」，短所として「何を言っているのか，理解できないことが多い」などが報告されている（藤野ら，2005）．オノマトペを使ったスポーツ指導においては，その長所は残した上で短所を減らすことが重要になると考えられる．また，柔道においては，オノマトペの持つ曖昧さや不正確さが，柔道固有の動作指導を曖昧で不正確なものにしており，死亡事故の遠因になっている可能性も否定できない．実際の柔道指導現場におけるオノマトペの使用実態や効果的な指導法を明らかにすることができれば，柔道の投げ技の技術を効果的に指導するための有用な知見を得ることができると考えられる．

【研究目的】

本研究では，アンケート調査によってオノマトペを使った柔道指導の現状と問題点を明らかにした上で，その問題を解決するための指導法を立案し，指導実践によってその効果を検証することを目的とした．その研究目的を達成するために，以下の2つの研究課題を設定した．

研究課題1：柔道指導におけるオノマトペの使用実態調査

中学校および高等学校の指導現場におけるオノマトペを使った柔道指導の実態をアンケート調査によって明らかにし，オノマトペを使った柔道指導の問題点と課題を抽出する．

研究課題2：オノマトペを使った柔道指導の実践

研究課題1によって明らかとなったオノマトペを使った柔道指導の問題点を解決する指導法を考案し，実際に指導実践を行うことによってその効果を検証する．

【研究課題1：方法】

調査対象者：2017年度中学校および高等学校の大阪府大会（団体戦）男女それぞれ上位16位以上の学校を調査対象校とし，対象校の部活動の指導者34名および部活動に参加している生徒304名を調査対象者とした．

調査項目：「属性」「重要だと思う柔道の局面」「オノマトペの理解」「オノマトペの使用」「オノマトペの伝えやすさ・分かりやすさ」「局面・技ごとのオノマトペ」「伝えたい要素・分かりやすい要素」「オノマトペに関する自由記述」

【研究課題1：結果】

1. 指導者は，オノマトペによってタイミングよりも力の大きさのほうに伝えやすく，生徒はオノマトペによってメカニズムよりも動きの速さとリズムが分かりやすいと感じている．

2. 使用頻度上位10件のオノマトペを対象に、オノマトペごとに要素と指導者と生徒の2要因でm×n分割表の検定を行った結果、10件中8件のオノマトペにおいて指導者が伝えたいと評価した要素と生徒が分かりやすいと評価した要素に有意な違いが認められた。

【研究課題1：考察】

運動のコツの伝達は運動実施者の主観的体験を言語化したものであることから、オノマトペを使った運動の指導は、指導者と学習者が間主観的関係を結び、主観から主観へと動感を伝達する行為であると解釈することができる。動きの中に含まれる「力の大きさ」「動きの速さ」あるいは「リズム」などのコツやカンを、擬音語が中心となるオノマトペを用いて表現した際には、主観的な関係の中での動感の伝達であるならば、オノマトペを発した側がその擬音語に込めた動感と、オノマトペを受け取る側がその擬音語から受け取る動感が必ずしも一致するとは限らない。このことは柔道指導現場で使われているオノマトペ上位10件中8件において、オノマトペによって指導者が伝えたいと評価した要素と生徒が分かりやすいと評価した要素との間に相違点がみられることから明らかである。また、藤野ら（2005）がオノマトペによって伝わる要素として「パワー」を挙げている点にも注意が必要である。パワーは力が大きく速度が遅い力型の「パワー」から、力が小さく速度が速いスピード型の「パワー」まで多様な形で発揮されるため、指導者が伝えたい「力の大きさ」と「動きの速さ」のバランスと生徒が受け取る「力の大きさ」と「動きの速さ」のバランスにズレが生じれば、発揮されるパワーは全く異なった質になってしまう。したがって、指導者はオノマトペを使う際に自分が伝えたいと思った要素と生徒が受け取る要素が必ずしも一致しない危険性があるということを認識した上で、伝えたい要素を具体的に言葉に表すなどの工夫が必要であり、指導者が伝えたい要素を確実に学習者に伝えることができれば、指導効率も上がり技術の向上に繋がると考えられる。

【研究課題2：方法】

調査対象者：武庫川女子大学健康・スポーツ科学部に所属する柔道指導法の授業を履修する柔道学習者58名および公認柔道指導者ライセンス保有者3名を調査対象者とした。

指導実践内容：図1に、各グループの指導内容の概略を示した。技は背負投に限定し、全国高等学校体育連盟柔道部の指導書に記載してある背負投の指導に、使用するオノマトペ「シュッ」を加えた「基本の指導」を、3グループ全てに1回目の指導として実施した。2回目の指導では、Aグループにはオノマトペにそのオノマトペで伝えたい要素を加える指導、Bグループには動きのメカニズムを加える指導、Cグループにはその両方を加えた指導を行った。

調査方法：調査対象者に、1回目と2回目の指導後にそれぞれアンケート調査を実施し、指導内容の分かりやすさと投げ込み動作中の意識について自己評価させた。また、撮影した調査対象者の投げ込み動作を、公認柔道指導者資格保持者3名に見せ、他者観察として動きの質的な評価を行ってもらった。

調査項目：大学生へは「指導の分かりやすさ」「力の大きさの意識」「余分な力が入っているか」「動きの速さの意識」「掛け急ぎをしていると感じたか」、指導者へは「余分な力が入っていると感じたか」「掛け急ぎをしていると感じたか」「背負投の完成度」「崩し・作りの評価」「掛け・決めの評価」を調査項目とした。

【研究課題2：結果】

1. 基本の指導よりも、要素やメカニズムあるいは両方を加えた指導のほうが分かりやすい。
2. 基本の指導よりも、要素やメカニズムあるいは両方を加えた指導の方が背負投の完成度が高くなる。

【研究課題2：考察】

学習者の投げ込み動作を指導者が他者観察した結果では、背負投の完成度は全グループにおいて2回目の指導後の方が高いと評価している。また、指導者の評価は、全グループにおいて余分な力、掛け急ぎともに減少している。全グループにおいて学習者も2回目の指導の方が分かりやすくなったと評価しており、いずれの指導案も基本の指導に何を加えようとしたのかを明確に言語化したことが、全グループの背負投の完成度が向上させたと考えられる。

【まとめ】

柔道指導においてオノマトペを用いる際には、オノマトペによって指導者が伝えたい動感を明確に言語化して学習者に伝える工夫や、動きの仕組みであるメカニズムの指導を先に行うことによって動きの正確性を学習者に習得させた上で、その後にオノマトペの持つ語感を使って動きの緩急や強弱を加えて指導する方法が効果的であると考えられる。

| 基本の指導＝1回目指導（説明3分，練習12分） | | | 2回目指導（説明3分，練習12分） | | |
|-------------------------|------------|--|--|-----------|--|
| Aグループ | | | Aグループ | | |
| 一般的な指導＋オノマトペ | → 撮影（約5分）→ | | 一般的な指導＋オノマトペ＋ <u>要素</u> | → 撮影（約5分） | |
| Bグループ | | | Bグループ | | |
| 一般的な指導＋オノマトペ | → 撮影（約5分）→ | | 一般的な指導＋オノマトペ＋ <u>メカニズム</u> | → 撮影（約5分） | |
| Cグループ | | | Cグループ | | |
| 一般的な指導＋オノマトペ | → 撮影（約5分）→ | | 一般的な指導＋オノマトペ＋ <u>要素</u> ＋ <u>メカニズム</u> | → 撮影（約5分） | |

図1. 指導内容の概略

【文献】

- 藤野良孝，井上康生，吉川政夫，ほか．運動学習のためのスポーツオノマトペデータベース．日本教育工学会論文誌，29(Suppl)，5-8，2005．
- 集英社．集英社 国語辞典．p.238．集英社，東京，2012．
- 吉川政夫．スポーツ指導とオノマトペ．体育の科学，60(9)，613-618，2010．
- 外山さゆり，吉川政夫，成田明彦．指導者のスポーツ・オノマトペに関する使用実態と使用意識－バレーボール指導者に対する調査から－．日本スポーツ心理学会第29回大会研究発表抄録集，203-204，2002．